

# 人形姫

山本幸久

## 第七回

7

「おい、ころ、よしたか良隆っ」

自分の声のデカさに、森岡恭平きょうへいは驚いた。そこまでデカイ声をだす気はなかったからだ。だからといってボリュームを下げることはできずに、つづけてこう言った。

「もつと真面目に漕げっ」

「わかってますよお」

背中から聞こえてきた熊谷良隆くまが いの返事ときたら、気の抜けた、なんともだらしないものだった。オールを漕ぐ力もものままで、恭平はよりいっそう腹が立った。

「わかってねえだろがっ。キヤッチもあつてなくて、ボートが全然進まねえだろうが」

「はいはこ」

「ふざけてんのか、てめえ」

良隆に苛つき怒っているというのに、なぜだかスカッとした気持ちにもなっているのに恭平は気づいた。大声をだしているせいかもしれない。

「ふざけてませんって。やだな、もう、キャプテン。そんな怒んないでくださいよ。後輩がこっちい見てるじゃないですかあ。コーチとしての権威がガタ落ちですよ」

「てめえが悪いんだろが。ガタ落ちにならないよう、気合い入れろ。掛け声かけるぞつ。ロオオオオキヤツチ」「ロオオオオキヤツチ」「ロオオオオキヤツチ」

ふたりはいま、曳抜川ひきぬきがわの水上にいた。競技用のふたり乗りボート、いわゆるダブルスカルを漕いでいる最中なのだ。ごく近くで鐘撞かねつき高校ボート部の現役生も水面を走っていた。彼らは舵手だしゆつきクオドルプルだ。

船首側のバウを良隆、船尾側のストロークを恭平で漕いでいる。進行方向を背に進むので、恭平には良隆がどんな表情をしているのかはわからない。

「もつと声だせ、良隆っ」

「ロオオオオキヤツチ」

今日は三月第二土曜だ。まだ十時前である。薄日は射していないが、  
らも肌寒く、吹く風は冷たい。押し寄せる波に苦しみながらも、恭  
平は良隆とふたり、オールを漕ぐ。次第に息があい、ボートは速度  
を増していった。

今朝、恭平は六時に起きた。

仕事でだって、こんなに早く起きることはない。三十分後には鐘  
撞高校の体育館にいた。そこでボート部と共に、ウエイトトレーニ  
ングをこなしてから、曳抜川の河川敷で五キロほど走った。

現役生に混じって、ボート部の部活をするようになったのは昨年  
の十一月だ。土日や祝日に参加するのだが、毎回は仕事の都合もあ  
るので無理だった。定期試験が近づくと学生のほうも部活を控える  
ので、この四ヶ月のうち、今回でようやく十回目である。

それでも身体が慣れてきて、最初の頃のように、陸上練習だけで  
へばるようなことはさすがになくなった。そうならぬよう、ほぼ毎  
晩、近所を軽く走つてもいたのだ。おかげで体重は去年から五キロ  
は減った。できればあと五キロは絞りたいと欲もでてきたくらいだ。

そしてまた最近では現役生に指導というほどではないが、助言も  
するようになった。自分からではなく、彼らから相談を受けるのだ。

恭平は実演を含めながら、事細かに説明してあげた。手取り足取り

教えることもあれば、LINEでやりとりすることも珍しくなかった。つい先日は良隆がいなくて、現役生にいたく感謝された。彼らが言うには、良隆よりも恭平のほうが俄然がぜんわかりやすいらしい。でもこれ、ここだけの話ですよ。コーチには言わないでくださいね。あのひと、基本はイイひとなんで、傷つけないんです。現役生に口止めされ、恭平は苦笑しながらも、わかったよと頷うなずくしかなかった。

傍そばで聞いていてわかったのだが、良隆の指導は結局のところ、「心をひとつに」「限界を突破しろ」「やればできるという気持ちが一番大事」といった具合に、精神論に陥おちいりがちなのだ。そうした言葉は耳当たりがいいので、やる気スイッチは入る。しかし具体的にどうすべきかがわからないので、現役生が戸惑うのも当然だった。

今年の六月に関東マスターズレガッタっていうのがありましてね。キャプテン、ひとつこれにダブルスカルで参加しませんか。

良隆にそう誘われたのは、先月なかばのことである。

ボート部の練習にはじめて参加した日、良隆とダブルスカルを漕いだ。乗る前までは不安だった。ふたりならばどうにかなるかもしれないとは思ったものの、なにせ高校卒業以来、十数年ぶりのため、全身が不安と緊張で微かすかに震えているほどだった。それがオールを握った途端、ぴたりと止み、気づけば水面を走っていた。身体が覚

えていてくれたのである。

そんな恭平と良隆を見て、現役生が「おおおおお」と感歎の声をあげた。彼らだけではない。たまたま 偶々、居合わせた溝口真純みぞぐちますみも手を叩いていた。そのとき弟の慎次しんじもおり、小莫迦こぼかにした表情だった気もするが、ただの気のせいだったかもしれない。

ともかくその後も良隆とのダブルスカルだけでなく、恭平ひとりでシングルスカルも漕ぐことがあった。試しにタイムを計ってもらうと、やはり高校時代に比べるとだいぶ落ちたものの、思ったよりも悪くはなかった。

良隆の誘いには二つ返事で乗った。断る理由はないからだ。と同時に彼がどうしてそんなことを言いだしたか、恭平はすぐさま気づいた。良隆本人はボート部の後輩達に見本を示したいと、もったもなことを言っていた。しかし溝口真純にイイところを見せたいがためにちがいなかった。

参加するからには優勝しなくちゃ意味ありませんよね、キャプテンツ。お互い頑張りましょうっ。

あれだけ張り切っていたにもかかわらず、今日は練習に身が入っていない。まるでやる気を失っている。この理由もまた溝口真純だった。彼女にカレシがいたのだ。良隆にすれば衝撃の告白があったのは、ほんの三日前のことである。

だからってこうもあからさまにガツカリするとは。まさかコイツ、  
関東マスターズレガッタにでないなんて言いださないだろうな。

「俺、関東マスターズレガッタでません」

言ったよ。

予想どおりの展開過ぎて、驚きはしなかったが、笑いだしそうになり、危うく啜すずったばかりのコーヒーを吹きだすところだった。無理矢理ごくりと飲みこんでから、「どうして？」と訊ねた。

「キャプテンだから言いますけどね」

良隆は窓の外に視線をむける。ふたりがいまいるのはファミリールストラんだ。以前は丸一日おこなっていたボート部の練習だが、学校側から生徒を長時間、拘束こうそくしないようにと注意されたそうので、昼過ぎには片付けまで済ませて解散した。その帰りがけに、ちょっと相談がと良隆に誘われて、ここで遅めのランチを食べながら聞くことにしたのである。

「俺、溝口真純が好きだったんですよ」

知ってたっつうの。

イケメン俳優が言えばサマになるが、ビリケンさんそっくりの顔では笑いがこみあげてくるだけだった。とは言え、いつもは肌艶はだつやがいいその顔も、いまいちテカリを失っていた。

「関東マスターズレガッタで優勝したら、告白するつもりでした。なのにカレシがいたなんて、あんまりだと思いませんか？ だったらはじめっから言っただけですよ。五ヶ月間も黙って、俺の純情を玩もてあそぶだけ玩んで」

三十代なかばの男が純情もクソもあるものか。

そこで恭平は高校の頃の一場面を思い出した。ボート部を辞めると言いだした良隆を、キャプテンである恭平が引き止めたことがあった。場所もたしか、このファミレスで、ただし夜だったように思う。自宅に電話して呼び出したのかもしれない。

退部の理由も思い出した。失恋だった。好きだった子にカレシがいたのがショックで、なにもかもやる気を失ってしまったのだと涙ながらに話したのである。いまとまるきりおなじだ。

コイツ、少しも進歩してねえな。

どうすればこうも成長せずに生きてこられたのか、不思議なくらいだ。地元で実家暮らしのせいだ、時間が停まっているのかもしれない。

それを言ったら、森岡人形の職人達もみんな似たようなものだ。良隆よりも長いあいだ、半世紀近く変わらぬ日々を暮らすうちに、世間から取り残されてしまったのだ。そうなるのを怖れて、弟は代官山にフィギュア事業部を移したのではないか。

この俺ときたら一旦はでていきながら、戻ってきちゃったってわけだ。まあ、そうなる前に男としての時間が停止しちまってるんだが。

「けどおまえ、後輩に見本を示すんだって、張り切っていたろ。あれは嘘だったのか」

「嘘じゃありませんけど」良隆はため息をついた。「なにかもやる気を失ってしまったんです」

これまた高校のときとおなじだ。

あんときはどう引き止めたんだっけ。

なにしろ必死に引き止めた。部員が退部しようものなら、キャプテンである自分が、コーチのショーキに大目玉を食らうに決まっていたからだ。

あ、そうだ。思いだした。新しい恋を見つけろ、女は星の数ほどいる、おまえに相応ふさわしい女がそのうちあらわれる、そのときまで待てとかなんとか言って説得したのだ。

「あのな、良隆」恭平はぐいと身を乗りだす。「関東マスターズレガッタは初夏、あと三ヶ月は先だ」

「それはそうですが」

「この三ヶ月のあいだ、溝口真純よりもイイ女がおまえの前にあらわれたらどうする？」



「どうするって」

「しかもその子にはカレシがない」

「まさかキャプテン」良隆も前をむき、身を乗りだしてくる。「会社にもうひとり、若い女の子が入ってくるんですか」

「ちがうよ」

「なんだ」良隆はあからさまにがっかりする。「期待しちやっただじやないですか」

「新たな出逢いがあるかもしれないだろ」

「そう易々やすやすとはいきません」良隆は素気なく言う。「そもそもがこんな田舎町に新たな出逢いなんてあるはずないでしょ」

「でも去年はさいたまスーパーアリーナで、よその人形メーカーの女性をナンパして」

「八ヶ月で別れたって話は、キャプテンに何度もしましたよね？」

「だったら、ほら、いつだか言ってたアヒルバスのお見合いバスツ

アー。あれ、いっしょにいくか」

「もういつてきちやいましたよ」

「いつ？」

「十二月と二月。クリスマス前とバレンタインデー前の二回です。

どっちも成果はありませんでした。っていうか、婚活してるような

女はやっぱりダメですよ」

なにがダメかは訊かずに聞いた。なにを言いだすか、わかったものではないからだ。愚痴は聞いてやってもいいが、知らないひとの悪口は勘弁願いたい。

「地元ならば小中高の同窓生とかと、再会してなんていうのもあり得るし」

「俺とおない歳ったらオバサンですよ。二十代じゃなくちやイヤです」

なんて言い種はぐだ。恭平は呆れた。その伝で言ったら、三十代なかばの良隆を、二十代の女の子が相手にしないはずだ。

なぜそれがわからない？

「代官山のほうって、けっこう若い女の子、いるじゃないですか」良隆の言う〈代官山のほう〉とはフィギュア事業部のことだ。「あの子達と呑みにいくことできませんか？ 会社の忘年会や新年会って、結局、本社のジイサンバアサンだけじゃないですかあ。そうじゃないか、会社ぜんたいでやりましょうよ」

そこでフィギュア事業部の子達とお近づきになろうというのか。

「そういえばウチの会社って創業何年です？ キャプテンが五代目だから、けっこう長いですよね。百年？ もしかして二百年？」

「二百年ってことはないが」

改めて訊かれると、よくわからない。こういうことに関しては経

理部長の幸田佐吉がだれよりも詳しいはずだ。なにしろ彼は森岡人形の大番頭である。

「どっかのホテルの会場で、創業何周年ってパーティーをやるのはどうです？」

良隆にそう言われた途端だ。

長いあいだ、忘れていた場面が脳裏に甦よみがえってきた。大勢のおとな達が万歳三唱をする姿だ。その中には宮沢をはじめとした職人達もいた。みんなまだ三十代から四十代くらいだった。祖父母や母もいる。父は？ 幼い自分を抱きかかえていた。弟の慎次の姿は見当たらない。まだ生まれていないのか、あるいは母のお腹にいたのかもしれない。これぞまさしく全社を挙げてのパーティーのはずだ。

いつ、どこで開かれたのだろう。

まだ昭和だったか、すでに平成になっていたか。鐘撞市内のホテル、あるいは市民会館か。社内のだれかに訊けば、覚えているはずだ。幸田であれば、日付まで調べてくれるだろう。

「ねえ、キャプテン。頼みますよお」

「なにをだ」

「やだな、俺の話、聞いてなかったんですか。パーティーですよ、パーティー。代官山の子達も呼んで、盛大なパーティーをしましようって話。可愛い後輩の願いを叶えてくださいな」

「叶えてやってもいいが」

「やった」良隆はガッツポーズをとる。

「関東マスターズレガッタにはでるんだぞ」

「わかりました。はは。俄然やる気がでてきました。ぜったい優勝しましょう。ははは。がんばるぞおお」

ファミレスをでたのは午後二時過ぎだった。恭平が支払い、森岡人形様で領収証をもらった。

「家までお送りしましょうか」ファミレスの駐車を横切りながら、良隆が言った。彼は車だったのだ。

「俺、寄るところがあるからいいや」

「どこいくんですか」

「宮沢さん家だ。おまえもくるか」

「いえ」良隆は即答だった。「俺、もう見舞いいきましたし」

一回いけば済むことでもなからうと思ったが、恭平は言わなかった。

「宮沢さん、やっぱ、会社やめるんですか」

なにを言いだすんだ、この男は。

「だから聞いた、そんな話」

「親父です。職人同士のLINEグループでは、その話題で持ち切

りだって」

宮沢以外の職人達は六十代から七十代にかけての年寄りのくせして、女子高生並みにスマートフォンが使いこなせた。オンラインゲームに興じたり、休日インスタ映えするパンケーキの店を見つけてでかけたり、アプリで健康管理をしたり、使い方はひとそれぞれだ。ティックトックをやるうと阿波三姉妹が相談しているのを聞いたこともある。

「少なくとも俺は宮沢さん本人から聞いたことはない。なんでそんな話になったんだ？」

「三日前、宮沢さんの娘の旦那が会社に来てたでしょう？ 宮沢さんが怪我したときも、娘夫婦のウチからの帰りだったんですよね？ だから娘と和解して、娘夫婦と暮らすことになったのではないかと。みんな羨ましがっているって、親父、言っていました」

全然ちがう。宮沢さんの娘婿である景浦かげうらに聞いた話はまるで正反対だった。景浦夫婦は西伊豆に一軒家を購入したいがために、宮沢が独りで暮らす家と土地を売ってほしいと話を持ちかけた。すると宮沢は烈火のごとく怒り、和解どころか物別れにおわり、状況はさらに悪化してしまったのだという。娘婿の景浦は義父の家に入ったものの、あげてもらえなかったらしい。森岡人形には、ほんとにいまも宮沢が現役として働いているのか、わざわざ確認しにきたので

ある。

本人が言うように宮沢さんは我が社にとって大切な人材です。

恭平がそう答えると、景浦はなんとも複雑な表情になっていたのを思いだす。さらに恭平はこうも言った。

いくつになっても、より高みを目指していかねばならない、職人は生涯、職人なんですよ。

景浦は西伊豆で左官職人として働いていた。もらった名刺の会社名をあとで検索したところ、社長は四十代にもかかわらず、日本どころか世界中で引っ張りダコという知る人ぞ知る名人だった。テレビをはじめ、マスコミでもよく取り上げられているらしい。

会社の規模は大きくないものの、三十代を中心に職人が二十人弱おり、いずれも名人の社長のお眼鏡に適った精鋭で、しかも宮沢の娘婿は社長の右腕としてすでに名を馳せているほどだった。

ネットでその記事を読んだとき、恭平は血の気が引いていくのを感じた。そんな実力の持ち主にむかって、あんな言い方をしたのかと、我ながら恥ずかしくてたまらなかったのだ。

なんにせよ、とうの景浦は加山雄三ミュージアムのお土産を置いて、おとなしく引き下がった。茶封筒に入ったお金に関しては多少揉めたが、結局、受け取られなかった。

「娘婿は義父が世話になりましたって、礼を言いに来ただけだ」恭

平はそれだけに留めておいた。他人の家の事情をペラペラしゃべるわけにはいかない。「いまおまえが言ったような話は一言もでなかった」

「そうなんですか？　じゃあ、どうしてあんな話になったんだろ？」

良隆はしきりに首を傾げる。恭平はなんとなく推測がついた。職人達はそれぞれ不幸とまでいかずとも、大なり小なり家庭の事情を抱えており、そのせいで勝手な妄想を膨らませていくうちに、理想的なハッピーエンドをつくりあげてしまったのではなからうか。あらゆる種の現実逃避と言っていいたいだろう。

「なににせよ宮沢さんはやめないよ。それだけは親父さんに伝えておいてくれ」

「わかりました」そう答えてからだ。「やっぱ、車、乗りませんか？　宮

沢さん家、こつからだどけつこうあるし、近くまで送りますよ」

「いいって。腹ごなしに散歩がてらに歩いてく」

「パーティーの件、ぜったいですからね」

別れ際、良隆が念を押すように言う。

「関東マスターズレガッタもぜったいだぞ」

♪機嫌直せと言われても

怒ってなんかないのよ

どうぞお気になさらずに

あなたはなにも悪くない♪

調子外れだが、ご機嫌な歌声が聞こえてきた。親父が好きだった歌だ。仕事中でも時折、口ずさんでいたことがあった。ミラクル・ローズの『無愛想ブルース』だ。いま熱唱しているのは宮沢である。慎次のヤツ、あのレコードをまだ返しにきてないな。

弟は恵比寿のクラブでDJをしており、そこで今度かけようと思つてと言い、親父の遺品である『無愛想ブルース』のEPレコードをウチから持っていったのだ。恭平がボート部の練習に初参加した日なので、すでに四ヶ月が経つ。

弟はいま東南アジアの某国で、フィギアの工場をつくるための交渉をしているはずだ。五日前に電話があり、これでフィギア事業部の売上げは三倍になると、鼻息を荒くしていた。政府関係者とのミーティングはどうなったのか、はたして交渉は成立したのか、いまだわからない。

宮沢の歌声が次第に大きくなっていく。いったいどこで唄っているのだろう。

すでに宮沢の自宅まで辿り着いて<sup>たと</sup>いる。ファミレスから歩いて、結局、三十分もかかった。朝早くからボート部との練習をしていた



こともあり、恭平はいい加減くたびれてしまった。

こんなことだったら、良隆の車に乗せてもらえばよかったよ。

二階建ての一軒家は宮沢が二十代なかばに建てたと聞いたことがあるので、築五十年にはなるはずだ。よく言えば古き良き昭和の佇まいを残した味わいのある家、はつきり言えばただのボロ屋だ。外壁の汚れが著しく、ぜんたいにうらぶれた雰囲気を漂わせている。

玄関脇のインターフォンもえらく旧式だった。そのボタンを幾度か押したのだが返事はなく、いずこからか宮沢の歌が聞こえるだけなのだ。

♪わけを話せというのなら教えてあげるう

傷ついても知らないわ

惚れた男の前でしか

笑えない質たちなのこのあたしい♪

この家、縁側があったな。

子どもの頃、宮沢の家にはちよくちよくきていた。主に祖父のお供だった。祖父は将棋が趣味で、宮沢がその相手をしていたのである。たいがい日曜の朝、朝食を済ませたあと、祖父に連れだされるのだ。宮沢の家までは歩きだった。そのあいだ祖父とどんな話を

したかは覚えていない。記憶にあるのは握りしめた祖父の手がしわしわでガサガサだったのと、ときどき肩車をしてもらい、坊主刈りのチクチクした手触りを面白がったことぐらいだ。

祖父とこの家を訪れたときはいつも玄関からではなく、裏庭の庭木戸から入っていた。するといつも決まって宮沢はすでに縁側で待ち構えているのだ。そして立派な将棋盤を挟んで、ふたりは将棋を指しはじめる。

恭平はと言えば、縁側から家の中にあがって、主に床とこの間で絵を描いたり、ブロックを組み立てたり、おもちゃのロボットやヒーローを戦わせていたりと遊んでいたものだった。

弟はいっしょにきていない。宮沢の娘と遊んだこともなかった。どちらも生まれていたとしても、まだ赤ん坊だったからだろう。ひとりで遊んでいても少しも退屈しなかった。

恭平は玄関から離れ、宮沢家のまわりを囲む生け垣に沿って歩き、裏へとまわっていった。生け垣はちょうど恭平の視線より十センチほど低く、すぐに縁側のある裏庭が見えてくる。そこに宮沢がいた。

♪ブウアイツソオオ、ブウアイツソオ、

ブアイソオオオブルウウスウウウウウウ♪

東京駅で倒れて怪我をしたのは一月のおわりだ。かれこれ一ヶ月ちよつとだ。鼻骨と頬骨を折り、いまも顔の半分は包帯が巻いてある。見た目は痛々しいが、本人は陽気に唄いながら、右手に持った剪定鋏せんていばさみで、庭木を切っていた。声をかけようとしたところ、宮沢が恭平に気づき、間奏を鼻歌で唄っていたのをやめた。

「坊ちゃん」

ふだん宮沢は恭平を五代目と呼ぶ。坊ちゃんなんてひさしぶりである。だが少しも違和感はなかった。幼い頃にここへくると、坊ちゃんと呼ばれていたのを恭平は思いだす。宮沢だけでなく、彼の奥さんにもである。宮沢もまた当時のことが不意に甦り、自然と口からでたのかもしれない。たぶんそうだろう。

「やあ」

恭平は生け垣越しに手を挙げる。

「どうなさいました？」

「玄関のインターフォンを押したけど、返事がなかったものだから」「すみませんねえ。ありやもう、ずいぶん前に壊れちまつてるんです。直すつもりではいたんですが、年寄りの一人暮らしに客なんかきやしないし、きたつてセールスの類たぐいだけで、だったら壊れてるほうが却かえって都合がいいと思っていたんで、そのまんまにしといたんです。ところが、怪我をしてからは職人達が入れ替わり立ち替わり

くるようになったら。みんなして早く直せってウルサくてかな  
いませぬ。ははは。で？ 坊ちゃん、私になんか用で？」

「ちよつとその」

様子を見にきただけで、とくに用はない。でもそうは言えなかつた。包帯の隙間にある宮沢の目が期待に輝いていたのだ。用がないなんて言おうものなら、がっかりすることだろう。それは避けたい。

「相談したいことがあります」

「私に？ 为什么呢？」

なにがいいだろう。恭平は慌てて考える。宮沢は目だけでなく、顔も輝いてきた。

「表で話すわけには」

「そりゃそうだ。どうぞ、そっからお入りください」

そっからと言うのは庭木戸だ。言われたとおりにすると、宮沢はそそくさと縁側から家の中へ入ってしまう。上は障子、下は曇りガラスの戸が全開なので、家の中が丸見えだ。床の間から宮沢が座布団を二枚持つてくると、そのうちの一枚を恭平に勧めた。こうなる  
と縁側に腰かけるしかない。午前中は薄日だったが、ファミレスで  
良隆と食事をしているあいだに雲が減り、いまはイイ具合に暖かな  
陽射しが裏庭に射していた。

「坊ちゃん、鈴カステラ、お好きでしたよね」宮沢も座るのかと思

いきや、彼は自分のぶんの座布団を置いて、床の間へ戻っていた。

「子どもの頃、よくお食べになっていましたもんね」

「うん、まあ」

たしかにここで鈴カステラを食べた覚えはあるものの、好きだったかどうかは自分でもわからない。ひさしく食べていないし、その単語を耳にすること自体、何十年ぶりである。

「昨日、コンビニにいったら売ってて、懐かしくて思わず買ったんですよ。あれはきつと、坊ちゃんがウチにくるのを察したんでしょな。はは。お茶といっしょにお持ちしますんで、しばらくお待ちください」

どうぞおかまいなくと言うべきところだろうが、宮沢はさつさと奥にある台所へと消えてしまった。

社長になってから、酔い潰れた宮沢をこの家に運んできたことは何度かあるが、決まって夜中だった。こうして昼間に訪ねたのは、それこそ祖父のお供をしていた頃以来にちがいない。裏庭から見える光景は少しも変わっていなかった。家の中もそうだ。床の間にいる鮭をくわえた木彫りの熊と、家から持ってきた戦隊もののロボットの戦わせたことがあった。

なにもかも昔のままである。ここもまた時間が停まったままなのだ。いや、ちがう。三十年の歳月は確実に流れている。祖父どころ

か親父もこの世にはいない。宮沢の奥さんもだ。宮沢の娘は嫁にいき、この家と土地を売るように望んでいる。そして恭平自身、ロボットで遊ぶこともない。

「どうです、坊ちゃん。ウマイですか」

恭平が鈴カステラを口の中に入れるなり、味わう間もなく宮沢が言った。

「ウマイですよ」

「そうですか。そいつはよかった」

宮沢はうれしそうに笑う。やはり包帯が痛々しい。怪我の具合を訊いてみたところだ。

「痛みは全然。飯もふつうに食べますしね。ただ医者言うには年寄りなんで、完治するまでに時間がかかるそう。ほんとに歳は取りたくありませんや、まったく」

「職人達が入れ替わり立ち替わりくるって言ってたけど、仕事の帰りに立ち寄っていくのかな」

「そうなんですよ。掃除とか洗濯とか、いろいろやってもらっちゃってます。正直、怪我をする前よりも家ん中がキレイになっただけで。はは。食事も作ってくれたり、持ってきてくれたりするんで助かっていますよ。昨日なんか阿波三姉妹が揃ってやってきて、鍋

を囲みましてね。そりゃ、いいんですが、三人でぺちやくちゃしゃべってて、二時間も経ってからスウちゃんが、どうしたのって訊いてきたんです。なにがどうしたのか聞き返すと、一言もしゃべんないじゃないってセツちゃんが言うんで、そりゃ、口を挟む間がないからだって、言おうとしたら」

宮沢さん、いたんだ。

「タカちゃんがそう言ったんです。冗談じゃない、ここはだれん家だと思ってるんだって怒っても駄目でした。三人ゲラゲラ笑うばかりで」

その光景を恭平は容易に想像できた。

宮沢も本気で怒ったわけではなからう。それなりに楽しかったにちがいない。三姉妹をちゃん付けで呼んでいるのが、その証拠である。若い頃はそうだったらしいが、いまは酒席でも滅多にめったこうは呼ばない。

そうだ、酒席といえば。

「宮沢さん、お酒は？」

「呑んじゃいませんって」宮沢は渋い顔になった。「くるひと、くるひと、みんなそう言いますが、私はほんとに酒をやめたんです。阿波三姉妹なんて、ほんとにヤメたかどうか試してあげるって、私の目の前で、鍋を突つつきながら、酒呑んでたんですよ。ヒドくあり

ませんか？」

それはたしかにヒドい。でもあの三人ならやりかねないことだ。

「今日も昼前に、遊木<sup>ゆぎ</sup>んとかが夫婦で揃ってやってきまして」

ホワイトシチューと肉じゃがをそれぞれタッパーに入れて、持ってきたという。まさに千客万来だ。

「遊木とは十年、いや、二十年ぶりぐらいに一局指したんですが、あの野郎、えらく上達してて、ナメてかかっていたら負けちゃったんです。悔しかったなあ。どこで腕を磨いたんだって訊いたら、パソコンだって言うんです。最近じゃあスマホでもやる、このあいだはドイツだかに住んでるひとと指したって。驚きましたよ。知らないうちに、私は未来に暮らしてたんですねえ」

未来に暮らしていた。

なるほど、そうかもしれない。三十代なかばの恭平だって、あまりの文明の進歩に、時折ついていけないことがいくらかもあるのだ、宮沢がそう思うのも無理はない。

「すみません、余計な話ばかりしちまって。はは。それであるの、坊ちゃんは私にどんな用で？」

しまった。そうだった。

相談したいことがあると、思わず言っしまい、宮沢がお茶を淹<sup>い</sup>れているうちに考えておくつもりが、幼い頃の思い出に浸っていた



せいで、できなかったのだ。

「それがその」さて、なにを相談しよう。

「ちよっとお待ちを」

そう言うとき宮沢は腰をあげ、また床の間にむかった。筆筒の**たんす**いちばん上の引きだしを開け、なにやら取りだしている。紙だ。それを表彰状のように両手で持って、そそくさと戻ってくると、恭平に差しだした。そこには男雛おびなと女雛めびなの顔が描かれていた。

「来年の雛人形の新作案です。話ってこのことじゃありませんか」

「あ、ああ」そうか。それがあつたな。

「やはりそうでしたか」我が意を得たりとばかりに頷いてからだ。宮沢は姿勢を正し、神妙な面持ちおももで訊ねてきた。「どうですか、これ。昨日今日の二日間を費やして、いちばん出来のイイやつなんですか」

「これまでのと趣おもむきがちがいますね」

昔ながらの気品を残しながらも、その顔つきはいずれもいまっぼかったのだ。

「そのへん、私も大いに悩んだんですが」宮沢は照れ臭そうに笑いながら、ごりごりと頭を掻く。「坊ちゃんはジャニーズって知ってますか」

「それはまあ」

日本では知らないひとのほうが少ないだろう。さらに宮沢はジャニーズに所属するグループの名前を口にした。恭平とて詳しくはないが、テレビで見たことはある。「男雛は、そのうちのひとりに似せてたんです」

「モデルにしたってことですか」恭平は驚きを隠せず、大きな声を出してしまう。「なんでまた」

「孫娘がそいつのファンなんです。まだ小学五年生なのに色気づいちゃいましてね。はは。それでまあ、女雛はその孫娘に似せてみました。なかなかの美人でしょう？」

「ですね」

「このあいだ、小学生が見学にきてたんですよ。阿波三姉妹はその話で持ち切りでした。子どもも可愛いのは小学生までだって。は。私の孫も鐘撞に住んでいれば、私の仕事場を見てもらえたんですが」

「小学校はもうじき春休みですし、お孫さんをこっちに呼んで仕事場を案内したらいかがですか」

なにか言わねばと思い、そう言ったものの、宮沢からの返事がない。できるだけ家族の話は避けておこう。そう思っていたところだ。

「私が東京駅にいた理由、坊ちゃんはおわかりになっていたんですよ？」

宮沢は真顔だ。ここでトボケても意味がないだろうと、恭平は正直に答えた。

「西伊豆に住む娘さんの家に、いつていたのでは」

「ええ」宮沢は頷いてからだ。「坊ちゃん、ウチの娘婿と会ったそうですね」

「え？」

「阿波三姉妹から聞きました。アイツが会社を訪ねてきて、坊ちゃんとふたりきりで、社長室で話していたと」

余計なことを。こんなことなら口止めをしておけばよかった。いや、たとえそうしたところで、あの三姉妹はしゃべっていただろう。

「娘とアイツはね、この家と土地を売れって言うんですよ。それで西伊豆に一軒家を建てて、私にいつしよに暮らそうって。この話、アイツから聞きました？」

「なんとなく。でも」

「でも、なんです？」

「宮沢さんにはまだまだ我が社で働いてもらわなければならない、引越されては困ると答えておきました」

少しアレンジを加えたが、まるきり嘘ではない。

「そうですか」宮沢はまたゴリゴリと頭を搔いた。「困りますか、私がないと。そうですか。はは」

「だけどよくわかりましたね、私が来年の雛人形の新作案の話をしにきたって」恭平は慌てて話を逸らす。「やっぱり、鈴カステラみたいに察したんですか」

「そうですねとお答えしたいところですが、種明かしをすると一昨日、溝口さんと話していたら新作のことがでてきました」

「彼女、ここにきたんですか」

「何曜日とは決まっていますが、週に一回はきてますよ。一昨日はタツカルビっていう韓国の料理をつくってくれましたね。ふたりで食いました。知ってますか、坊ちゃん。タツカルビ」

「ああ」タツカルビのことよりもだ。「そのとき新作案の話がでたわけですね」

「毎年、新作がでているが、あれはどんなふうが決まるのかって訊くんで、基本は私が考えて、職人みんなで話しあうのだと教えてやっただけです。そしたらあの子、私も案をだしていいのかって」

「なんて答えたんです？」

「この私と競いあおうとは、いい度胸をしてるじゃないかって、ガツンと言ってやりました。ところがあの子、でっかい目で瞬まばたきもせず、私のことを真正面からまんじりと見やって、こう言い返してきました」

度胸だけじゃありません。自信もあります。

「それで宮沢さん、どうしたんですか」

「どうもこうもありませんや。甘やかしていればイイ気になりやがって、生意気な口をきくなと」

「言ったんですか」

「ここまででかかったのですが」宮沢は自分の喉元を指差す。のどもと「それと同時にあのお嬢ちゃんがどんな雛人形をつくろうとしているのか、知りたい気持ちが膨れあがってきましたね。結局は言おうとしてた言葉をタツカルビといっしょに飲みこみまして、やるだけやってみたらいいと代わりに言っておきました」

もしかしたら溝口はわざと喧嘩を売ったのではないか。どうしてそんな真似を？ 怪我や家族のことで、シヨボクれていた宮沢を奮い立たせるがためだ。

「坊ちゃんはその子のこと、どう思ってます？」

「どうって、会社のためによくやってくれてるなど」

「女として見ちゃ、いませんか」

「とんでもない」女として見たところで、男としての機能が働かないのだ。意味がない。

「そいつはよかった」宮沢はホッと胸を撫で下ろしている。「いやね、坊ちゃん。こりゃあ私の憶測なんです、一応、お耳にいれておきます」

「なんですか」

「あの溝口って子、四代目がよその女に生ませた子じゃ、ありませんかね？ つまり坊ちゃんとは異母兄妹ではないかと」

〈つづく〉